

「ソーシャルワーカーのネットワーキングスキル」

—精神保健医療福祉領域におけるスキルの可視化—

○ 日本福祉大学 吉川真由美 (010201)

キーワード3つ：精神保健医療福祉・ネットワーキング・ネットワーキングスキル

1. 研究目的

日本の精神障害者は600万人を超え、どの社会福祉領域にも精神障害のある当事者やその家族が存在する。これらの人々が直面する課題は多岐にわたり、日常生活から社会参加に至るまで支援が必要である。そこで、精神保健医療福祉領域におけるソーシャルワーカー（以下、ソーシャルワーカー）には、当該領域にとどまらず、分野横断的にフォーマル、インフォーマルを超えてつながるネットワーキング実践が必要となる。しかし、ネットワーキング概念は多義的で、方法論も明確にされていない。一方で卓越したソーシャルワーカーはネットワーキングを展開しているが、そのスキルは十分に可視化されていない。

本研究の目的は、ソーシャルワーカーのネットワーキングスキルを明らかにし、それを可視化することである。これにより、ソーシャルワーカーが自身のネットワーキングスキルを客観的に把握し、自己省察を行うことで、ネットワーキングスキルの習得と向上の促進が期待される。また、ソーシャルワーカーがネットワーキングスキルを習得することで、地域の関係者や機関と連携する能力が向上し、多様化する地域の福祉課題に迅速かつ効果的に対応できるようになる。さらに、この研究が多機関や他分野のソーシャルワーカーにも応用されることで、分野横断的にフォーマル、インフォーマルでのネットワークが促進され、縦割りサービスにとらわれない包括的な支援が構築されると考える。将来的にはソーシャルワーカーの実践ガイドとしての利用が見込まれる。

2. 研究の視点および方法

卓越したネットワーキング実践を展開しているソーシャルワーカーに対し、半構造化インタビュー調査を実施した。対象者は5年以上の現場経験を持つ精神保健福祉士の4名で、調査は2024年2月から4月にかけて実施した。インタビューから得られたデータは逐語録として記録し、質的内容分析の手法を用いてコーディングおよびカテゴリ化を行った。

3. 倫理的配慮

本研究は日本福祉大学大学院「人を対象とする研究に関する倫理審査委員会」（承認番号23-025）の承認を得て実施した。また、「日本社会福祉学会 研究倫理規程」を遵守し、本発表に関連して開示すべきCOIはない。

4. 研究結果

調査対象者4名のヒアリングから223のカテゴリを抽出し、それを表1のように以下の27個のコードに分類した。①アセスメントスキル②ネットワーキングの障害要因③エピソードの共有④ICT（情報通信技術）の活用⑤目的の明確化⑥ネットワークの柔軟性と進化⑦他分野間での理解促進と役割の共通認識⑧非公式でのコミュニケーション⑨直接的な人間

関係構築⑩協働に基づくネットワーク形成と強化⑪興味関心とアイデンティティ⑫繋がることを諦めない⑬繋がる人や組織を見極める⑭無理のないネットワーク⑮現場で直接会う⑯個人の資質と専門性の区別⑰自己開示⑱精神保健医療福祉の推進と改革⑲精神保健医療福祉領域での経験と学び⑳積極性と柔軟性㉑ローカルネットワークの理解と構築㉒相互理解と協力㉓相手を大切に㉔学習の姿勢㉕自己成長と拡張㉖対等な関係構築㉗コミュニケーションスキルに分類した。

5. 考察

調査対象者の語りを通じて、改めて調査対象者の選定を再考する必要性が明らかとなった。経験年数が長いほど、精神保健医療福祉領域における未整備な制度のジレンマに直面しながら

も、精神障害のある人々を支援しようと模索し、一人では解決できない課題に対して多機関のソーシャルワーカーと協働しながら、新たな解決策を生み出していくという語りが多く見られた。また、「アセスメントスキル」のカテゴリのコードの中では、ソーシャルワーカーが直接現場に足を運んでクライアントと対話し、環境を把握することが重視されていた。しかし、ICT（情報通信技術）の活用により、この伝統的なアプローチを補完する新たな手段が提供され、ICT（情報通信技術）の可能性についても言及があった。経験年数や時代背景などの要因がソーシャルワーカーのスキルに影響を与える可能性が示唆された。

本研究の限界として、調査対象者が少数であり、結果を一般化することが困難である点が挙げられる。今後は、調査対象者を増やし、さらなるデータ収集を行う必要がある。これにより、広範なソーシャルワーカーのネットワークングスキルの実態を捉えることができると考える。また、得られたデータを基に、ソーシャルワーカーがどのようなスキルを習得すべきかを具体化し、将来的には実践ガイドの作成を目指していく。

表1 逐語録からコードの抽出とカテゴリ分類

No	コード	カテゴリ
1	つながる人のアセスメントをする。	アセスメントスキル
	つながる人の景色を把握する。アセスメントの必要性。	
	内なる組織のつながりを知る。	
	相手の専門性を知る。	
	相手が求めていることを聞く。	
2	形がある中ネットワークはやりづら。顔の繋がりがだけのネットワークも存在する。成果を上げることが目的ばかりでない。	ネットワークの障害要因
	年齢や経験を重ねるとプライドも出てきて繋がりにくさもある。	
	組織的な制限、時間のなさ、組織での立場で繋がりにくさもある。	
3	興味関心ごとの共通話題ができると、本人や本人以外の家族ともつながることができる。	エピソード共有
	興味関心がないと関われないと思う。利用者さん以外にも自分のアイデンティティに関しても関心がないと、誰かと繋がっていかないのではないか。	
	自分の興味関心のあることは他の人と共有したくなったりする。	
	精神科での課題や関心ごとでコミットしたいと思う人は精神保健福祉について考えたいと思っているので楽しい。	
4	対面や直接の対話にこだわらず、ICT（情報通信技術）を活用したネットワークの発展の可能性も考えられる。	ICTを活用
	将来、効率と合理性を重視する必要がある、オンラインを活用しながら効果的なファシリテーション方法について議論することも重要。	
	不確定要素を含めて、画面越しでも効果的に伝えるためのアセスメント力や発信力が求められる。	
	その人を救うために繋がる人との目的は違っていい。	
5	つながる人各々の目的は何かを把握する。	目的の明確化
	つながる人が何を求めているのかを把握する。	
	お互いの目的が違ってもつながることがあるけど、その人を支援するという認識のない人とはつながらない選択肢もある。	
	ネットワークする目的、なぜつながるのかをはっきりさせる。	
	ゴールを見据えてつながる人を探す。	
	自分のつながり目的を持つことで、相手にもつながってもらいたいと思ってもらえる。	
6	その時々に合わせて繋がりを変化させる。	ネットワークの柔軟性と進化
	専門性を見方によって、役割が足りなければ充足させる。	
	繋がりの現状をみつ、つながりを進化、発展させていく。	
	常に繋がっていないくてもSOSが出せる関係性が構築できていければいい。	
	定期的に繋がりの見直しをする。	
	必要に応じてネットワークを柔軟に変化させる。	
27	つながる人に伝わるような言語やコミュニケーションのスキル。	コミュニケーションスキル
	電話やオンラインでは表情や仕草、空気感などの情報が少なくなるため、アセスメントや関係形成が難しくなるが、理論的には関係性の構築やアセスメントは可能。	
	ネットワークの基本は相互理解。相手のアセスメント能力や受け取り方に依存するため、対面だけでなく相手を理解することが難しい場合がある。そのため、不確定要素を含めて、画面越しでも効果的に伝えるためのアセスメント力や発信力が求められる。	
	メールにおいても句読点から読み取る内容が重要であり、ネットリテラシーと共に幅広いアセスメント能力が求められる。	
	コミュニケーションがうまいと個人の資質に頼るよりも、スキルとして確立できる方が信頼性がある。	
	精神疾患は周りにわかりにくい。ソーシャルワーカーが明確につたえて、地域課題を一掃に解決していく力になれることを説明できることで協働してくれる。	
	自分がわからないこと、報告すること、相談することでネットワークとなっていく可能性がある。	
	自分が立ち止まっていることを話せる人を見つけておく。	
自分だけで納めないようにすると、レスポンスしてくれる人がいる。レスポンスがない時は繋がれていない可能性もある。		
必要なものを必要であると他職種へ伝える。		